1991年11月1日発行　（財）高知市文化振興事業団

文化高知 44

文化遺産を生かした地域おこし

筒井　直和

松尾芭蕉の「閑かさや岩にしみ入る蟬の声」の句で有名な、山形市の〝山寺〟を知る機会を得たが、山形市ではこの山寺の（眼下を流れる立谷川を挟んだ）対岸の高台にふるさと創生事業で芭蕉記念館を建設し、伝統文化の振興と地域おこしに役立たせることとしている。

また、同県では芭蕉が辿った〝奥の細道〟のうち、県内の主要ルートを「芭蕉路」と名付けて観光の目玉コースとし、歴史資料館の建設や文化遺産の保存等に努め、観光事業の振興を図っている。

この山形県のように、その土地の文化や歴史的遺産を生かして地域おこしを行っている例は、全国的にもめずらしくない。

本県内でも佐川町においては、「文教の地　佐川ルネサンス運動」と題し、町が土佐藩の筆頭家老深尾家の城下町であったことから数多い歴史的文化遺産を生かし、〝豊かで希望に満ちた文教のまちづくり〟をめざして、活発な運動を展開している。

町では、ふるさと創生事業の全国的な展開に先立つ昭和五十九年度に、「佐川二十一世紀・ルネサンスプラン」を策定して地域づくりに取り組み、諸々の施策を講じてきているが、この九月にはソフト事業の中核となる佐川ルネサンス大学が開学し、また、地質学上世界的にも貴重といわれる資料を展示する地質館も来年四月には開館の運びとなるなど、順調な進展をみている。

「アリス」　美馬須美子

東の安芸市においては、明治時代より今日まで正確に時をきざむ野良時計や、藩政のたたずまいを残す武家屋敷などが残っており、これら歴史的文化遺産を保存するための歴史民俗資料館を建設し、また、日本の代表的な作曲家の一人である弘田龍太郎の出身地であることにちなんで、〝童謡の里づくり〟をすすめるなど「歴史的文化の香るまちづくり」に取り組んでいる。

以上県下の代表的な二市町について、文化や歴史的遺産を生かした地域おこしの事例を紹介したが、わが吾北村にも県指定無形民俗文化財の津賀之谷獅子舞があり、若者による和太鼓の創作、或いは悠久の時を刻んだ藪椿の巨樹等優れた自然があり、これらわが村特有の資源を生かして村おこしを図っている。

「物」に注目されがちな社会の現況から、心の豊かさが求められる昨今、文化的な事業による地域おこしの進展が、今後一層期待される。

（全国町村会長・吾北村長）

甦れ土佐のいごっそう

友永　詔三（アキミツ）

先日、私の個展の会場で徳島の人を紹介してもらった。高知県境で、室戸市近くの町の出身だということで親近感をおぼえ、話がはずんだ。たまたま、私が画廊に着く前に、四万十川に川魚を食べに行こうと話し合っていたとのことで、なおさらだと思う。同じ地方出身というだけで身近に感じる。二十代、三十代と違って、ふる里がなつかしく良い所ばっかし思い出される。思い出というものは、時間とともに美化されてしまうものだろうか。

○

私の創る作品も、ここ数年、四万十川での思い出をテーマにしたものが多くなっている。今、東京でも、四万十川というと、みんな最後の清流だとか、きれいな川なんだねって、と返ってくる。それは、テレビを始めとする、マスコミの影響だろう。自分の中では、子供の頃の四万十川とは違ってしまったと思いながらも、そう言われると、嬉しく、微笑んでしまう。

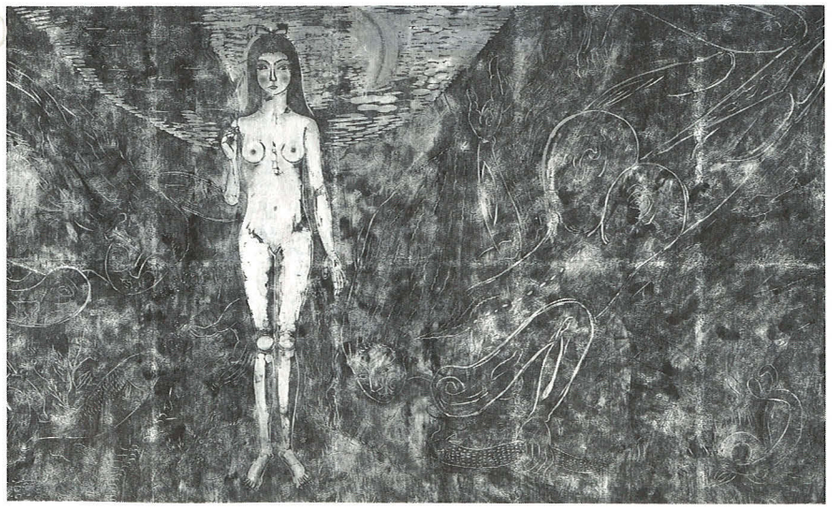
私も、テレビの仕事に携わることもあるが、カメラというものは、ある一部分をとらえるだけで、視聴者には、それで全体が解ったように思わせてしまう、おそろしい世界だ。そのために、近年、どこに行っても、同じような個性のない考えや姿の人々、町や村が日本中多くなってしまって来ているように思う。

○

二年前、高知市で開かれた、市制百周年記念事業「ふる里へのメッセージ展」に招待されて出品したのを機会として、高知での個展や、シンポジウムによんでいただくようになり、頻繁に帰るようになって来たが、帰る度に、〝いごっそう〟〝はちきん〟の若者の姿は無くなり、建物なども、どこにでもある町のようになってきつつあるように思う。それは、マスコミを通じて知る大都会へのあこがれへの現われだろうか。

そういう私も、かってはそうだったと思うけれど、今は土佐人の〝いごっそう〟を失わず、他人には無い、自分だけの世界を創り出そう、そして新しいアートを目指して、アート界の坂本龍馬になりたいと思っている。そして、多くの偉大な先輩を育んだ土佐の国、その高知県人として生まれたことを誇りに創作に励んでいる。高知の町づくりも他の県や人々にはない、高知独特のユニークな発想で、二十一世紀をリードし、真の土佐の〝いごっそう〟を、甦らせてほしい。

（造形作家）



ふるさとに思いを込めた「四万十の譜（うた）」

渭南と上庄先生

西村政英

一口に渭南と言っても、古代（約千年前）に鯨野（いさの）郷（現土佐清水市足摺岬伊佐）と呼ばれ、足摺崎は蹉跎崎と言われた。中世に入り荘園時代には波多郷（幡多ノ庄）支配下では、幡多の南部地域を以南、伊南、渭南と総称したと言われる。

また、中国の長江の支流にあたる渭水から呼び名をとり、四万十川を境界として渭南と称したとも伝えられている。

近世に至り、長宗我部地検帳によると、以南の総称は四万十川下流南岸の立石、布（現国立公園境）を南西に大月町（旧月灘村）に至っていた。

論述していると限りがないが、この変幻極まりない大自然の中に、上庄（上田庄三郎）という人間はどう育ち、どう生きる糧としたかということをみてみよう。

わが渭南地方の北西部は、今ノ山の連山、南東部は黒潮の洗う足摺岬を中心に、陽の光は果てなく常夏の緑樹は大地を覆う。地殻の変動と隆起による海岸段丘、怒濤による海蝕崖と無数の洞穴、まさに天下の絶景である。この「足摺宇和海国立公園」を、里人は略して「渭南国立公園」とも呼ぶ。

上庄先生は、この公園内の海中展望塔のある龍串の北東一㎞の台地、平ノ段に一八九四年（明治二七年）に生まれた。貧農の出であったが五体頑丈、よく一荷商人の祖母を手伝い、父と伐材業を共にしながら勉学に励み高知師範学校を卒業した。僅か十一年間の短期間であったが、ふるさと渭南の地にあって驚異的な教育理論を編み実践を続けた。

師の反権、反骨の気は時の権力支配者とは相容れず、「石もて追われる」如く渭南の地を後に上京した。教育評論創始者としての数々の著述や口述は、戦前、戦中、戦後一貫して節を曲げることなく、一九五八年十月に逝去した。師のこよなく愛したふるさと龍串には、巨大な顕彰碑が建ち、万人に語りかける。（拙著『評伝上田庄三郎』を参照）

龍串に建つ顕彰碑

師のゆるがぬ教育理論の基底は、「渭南教育」に心魂を傾けた十一年間の実績とその展望策であり、「大地に立つ人間教育」の主張であった。

その概要は、

一、自由と創造を求める子供育成の具現化であった。すなわち、ふるさとの大地に立つ人間の営みを探り、その源泉に学び学問と勤労精神の培養である。そして、ふるさとの山河や黒潮に語りかける人間の詩心と、平和と民主の魂創りであった。

二、教育とは、教え子達の幼少時代からのふるさとにおける生活体験が基礎である。その中から学びとる先人の労苦と協力と慈愛に成り立つ歴史観。ふるさとの一木一草を愛し育てる心であった。

三、また、「苦難にあえば賊を呼べ凶を呼べ」の精神高揚であった。師は実に涙もろく、教育は教師の涙の中に在るともいった。

今や真の学力、体力、生活力を求めた大地は忘れられ、海辺に歌い、山野を駆ける子供達の姿は消え、過疎に追いうちをかけるような、全国一律の教育方向に私は涙する。春夏秋冬、巌頭に砕ける波しぶきを子守歌と聞き、そびえ立つ渭南アルプスに涙し合掌し、奮起する心の培養が原点となり、特異で傑出した人物宝庫のふるさと渭南を創ったのではないかと、しみじみ思うのである。

（教育作家）

成せば成る
オペラ「よさこい節」の高知公演

土佐　文雄

オペラ『よさこい節・純信お馬』の東京公演（平成二年五月十九日、二十日）が数日後に迫ったとき、私たち関係者数名は県知事室で中内知事と会っていた。東京公演の次には高知でぜひ上演したい、そのためには県当局の支援も必要なので、知事にぜひ東京公演を見てもらいたい、とのおすすめの会談だった。

そのおり私はこんなことを云った。

「知事さん、今回この土佐物オペラ『よさこい節』が日本オペラ協会の手によって、文化庁の主催事業として行われることは、これはある意味で大事件というべきですよ。県はいま国民休暇県などといって何億もの予算を使って全国で宣伝していますが、この土佐物オペラが評判になれば、これ一つで何年分もの高知の宣伝になりますよ」

ところでこの東京公演までこぎつける過程は並大抵ではなかったのである。そもこの土佐物オペラに火をつけた張本人は高知大学の向原教授であった。

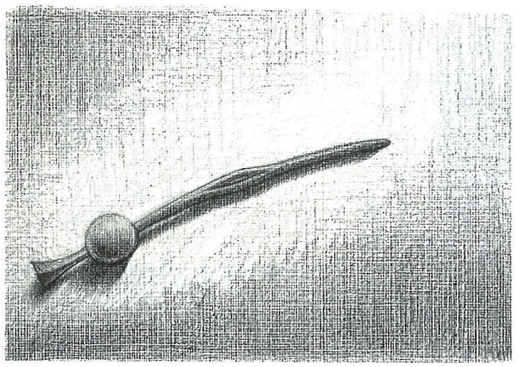
彼がいうには日本にヨーロッパからオペラが入ってきた明治いらいもう百数十年になる。この過程で多数の日本のオペラ歌手も育ち、いまでは外人歌手と対等に役をこなせるだけでなく、日本人だけで一人歩き出来るまでになった。

そこで日本オペラ協会では、日本物オペラに着手し、「修禅寺物語」や「唐人お吉」などこれまで十指にあまる日本物オペラを手がけてきた。そしていまでは日本独特のオペラを世界の舞台にという時期にさしかかっている。

日本は経済アニマルとしてはしたたかだが、文化の進出に弱い。日本物オペラをぜひ見たいとの声が世界に強い、とのことである。

そこで世界に通用するオペラを、というわけで、向原教授がそのネタとして目をつけたのが、よさこい節にまつわる純信お馬物語である。日本の封建社会での道ならぬ恋は近松物に代表されるように心中物が多い。心中は日本独得のものではあるが、しかし近代的自我の強い外国人には通用しにくいというのである。その点この純信お馬は二人の禁断の恋を実らすために死よりも生を選んで国抜けを計っており、世界に通用するという。しかも舞台はお寺という日本的な舞台である。

そこでこれをぜひオペラにしたいのでその原作小説を私に書いてくれというのである。そのときこう条件をつけた。「カルメンに負けない原作小説を書いてもらいたい。そのかわりそれの作曲者はいま日本一と目されているオペラ作曲家原嘉壽子同志社女子大教授に担当していただく」というのである。



そこで私はメリメの原作小説「カルメン」を読んでみた。小説としての良さやうまさも抜群のもので正直私はびっくり仰天した。だから私の方の小説づくりは己の非力のため並大抵ではなく、めっぽう苦労したが、しかしその苦労話はこの稿の目的ではないのではぶく。

ともかくまがりなりにも書きあげた小説を原が受け入れてくれ、作曲しオペラ化した。それを日本オペラ協会がやることになった。当然のこと初演は高知で、ということであったが、経費の点で挫折した。

なにさまオペラというのは芝居など他の舞台と異って、オーケストラなども含め人員の点からだけでも莫大な経費がかかる。観客入場収入の何倍もがいるわけで、その資金集めが残念ながらその時点では高知では出来なかったのである。高知の文化基盤にはそんな体制が無かったからである。

せっかく初演権をもっていたのに資金集めに破れたわけだ。このため

止むなく日本オペラ振興会と文化庁の主催で、東京で初演する運びとなったのである。

私たちは初演には破れたけれど、なお高知公演を諦めてはいなかったので知事に観覧をおすすめしたのだ。中内知事は多忙の中で、東京公演を観劇してくれた。

幸い二日間にわたる東京での初演は大好評で、批評家からも「世界に通用するオペラ」として高い評価を受けた。「朝日」「毎日」「読売」「産経」の全国各紙共、絶讃を惜しまなかった。そして土佐物オペラ『よさこい節・純信お馬』は平成二年度の日本で上演された外国物も含めたオペラの中で、第一位にランクされるに至ったのである。

さあ、ここまでくると、この土佐物オペラを地元高知で上演出来ないなんて恥としかいいようがない。関係者は燃えた。この熱意に一番先に高知新聞社がこたえてくれた。ついでRKC高知放送、財界や文化界も「オペラよさこい節高知公演を成功させる会」（吉村眞一会長）に結集してくれた。高知県芸術祭執行委員会も加った。これら地元の主催団体の動きを受けて、日本オペラ振興会、文化庁も主催団体となってくれた。こうして高知公演が動きはじめた。

高知公演はその舞台の中身も高知勢を加えることになり、主役のお馬をはじめ、群集七十余名も県民が出演することになった。またオーケストラも高知勢を中心とした四国フィルハーモニー約五十余名が担当することになった。こうして平成三年の四月以来、猛練習を積み重ね、九月末から東京勢と合同して総仕上げを行い、ついに十月十二日、十三日の両日、高知県民文化ホールで、超満員の観客の前で、オペラ『よさこい節・純信お馬』は大成功を収めたのであった。

そしてこの高知勢の加ったオペラが、RKCテレビで、またNHKの衛星放送で全国へ、そして世界へ流れる運びとなったのである。

一度は挫折し、不可能と思えたことが、熱意をもってやれば多くの協力を仰ぎ、ここまで出来たのである。まさに成せば成る、である。この文化的体験を共同財産として今後に生かしたいものである。

（作家）

今度の学長は山岡さんだと聞いた時、どこかで聞いた名だと思った。今から二十年前のことである。私は歴史が専門だから山岡先生の経済学にはとんと不案内である。しばらくして思い出した。ゴルツの『独逸農業史』の山岡さんだ。

今では既に古典の部類だろうが、昭和二十年代の学生だった私の友人や先輩でドイツ史を専攻しようとする者が先ず必死に探すのがゴルツだった。大学院生の頃の翻訳だから、先生にとってもゴルツは研究生活の出発の時期に位置していたらしい。先生自身が回想している。「ゴルツの翻訳、これは楽しかったです。ゴルツの書物みたいなものを翻訳して一生楽しくすごせるなら、学者いうのもいいもんだなあとその時は思いました。悩みばっかり出てくるのは、それから後のことです。昔は翻訳してたら学者になれる時代がありましたからね。今は違います。」（『思い出草・第二集』京都大学経済学部）。終りの「今は違います」が、いかにも先生らしい。

山岡亮一先生を偲ぶ

渡邊　昌美

後年、ゴルツを再版なさらないのですかと申し上げたことがある。先生は笑っているばかりで、何とも言われなかった。

先生の研究が最も輝いたのは勿論京都大学時代だろうが、憶測するばかりで詳しいことはほとんど知らない。兵役その他で随分苦労もされたらしいが、これは回想録『学窓の灯』（高知新聞社）である程度窺うことができる。これを一読した時、他人を傷付けない配慮の行き届いているのに驚いた。その点、先生の人柄が実によく出ているように思う。

遠くから眺める学長時代の先生は、どこか無為にして化するの趣きがあった。口もとから微笑と煙草を離されなかった温顔が目に浮かぶが、本当は気性の烈しい方ではないかと想像したこともある。節度の感覚、克己心の強い人であったことは間違いない。

時折お目にかかるようになったのは、退官後、文化振興事業団の理事長に就任されて以後のことだ。といっても事業団とは関係ない。たまたま住まいが近くて散歩道が交錯したにすぎないのだが、悠々たる行路の人であっても不思議はない私に淡い好意を示して頂いたように思う。今では、いわば完成期の先生に接し得たことを懐かしく思い返している。先生を初代理事長として文化振興事業団が発足し、本格的な軌道に乗ったことは今更喋々するまでもない。関田英里座長のもとでの討論の結果が本になった『高知の文化を考える』をはじめ数々の出版にも、文化セミナーの開催にも、先生の影の落ちていないものはないと思う。

（高知大学人文学部教授）

先祖まつり（一）

依光　裕

高知市の西郊にあたる本宮町と上本宮町に古くから住む「河野氏」一族のルーツは、瀬戸内海の海賊ということになっており、春秋の二回、先祖まつりを行っている。

場所は瀬戸内海の大三島神社を勧請したという氏神の境内で、十四、五人も車座に坐わるといっぱいになる。会費は五百円。この会費で当屋は酒を用意し、当屋以外の子孫ども は各自好みの料理と、皿、盃、箸を風呂敷に包み持ち寄る習わしになっている。

―会費を増額し、料理や食器も当屋に仕切らせばよい。その方が海賊の子孫らしい豪勢な先祖まつりになるはずだし、各自が料理を持ち寄る手間も省ける―

だれもがそう思うとみえ、過去に何度か提案されたことがあったらしい。だが、そのたびに一族の長老たちは「昔、やったことがあるが、いかん」と、首を横に振ったという。

長老の話によると、最初の当屋が三枚の皿鉢料理を並べると次の当屋は五枚、その次は七枚と一族の仲でも見栄が並ぶことになるそうだ。

皿鉢料理は偶数の枚数を忌み嫌うので、よけいに始末が悪い。ついには参加子孫の数を上回わる皿鉢が並ぶに至ったというから、いくら海賊の子孫でも「こりゃいかん」と気がついたのだろう。

この先祖まつりは「何家」の場合でも、当屋以外は各家の世帯主か、その家の長老が一名参加することになっているらしい。私の場合「河野」から「依光」に姓を変えたが、息子が旧姓を名乗り、その世帯主であるため参加の資格を認められている。

以来、二十余年を経たが、この間に「河野先祖」のまつりは少しずつサマ変わりをした。まず何人もの長老が先祖の仲間入りをし、そのたびに、祠の前で酒を酌み交わす子孫の顔ぶれが変わった。

これは世代の交替ゆえに仕方のないことだが、明治中期にこの世に生まれた長老の存在は、酒の肴に幕末から昭和に至る『周辺のエピソード』を語って貴重だった。

「河野先祖」のまつりの日、一族の長老たちは語った―。

この辺は昔、土佐郡杓田村といいよった。区域はというと、そうじゃのう。おおざっぱにいうて、東は中須賀限りで、西は岩ヶ渕、鳥越限り。南は縄手堤、北は福井・蓮台が境じゃろう。

今の町名を並べたら区域がハッキリするきに、今度の「先祖まつり」までに、一番の新入りが調べちょいとうせ。

※旭駅前町、旭天神町、元町、南元町、佐々木町、長尾山町、旭上町、水源町、横内、塚ノ原、西塚ノ原、口細山、鳥越、岩ヶ渕、大谷、上本宮町、本宮町、旭町、中須賀町。

そのほとんどが、長宗我部氏の一族じゃった大黒氏の領地じゃって、本宮神社は、この杓田村の産土神ということになる。

よう？藩政時代の杓田村の人口はどればァじゃったつか―そんなこた知らん。それも分かるなら調べちょいとうせ。

※戸数・百三十二、人数・八百三十五、馬・六十八。
「寛保郷帳」（一七四一～一七四三）

この杓田村が、石井、福井、蓮台、尾立と合併して土佐郡旭村となったがのう。なぜ、地名が「旭」となったか知っちゅうか？

合併して最初にもめるが地名よのうし。ここも、そりゃもめたと、地名をどうするかで―。結局、頭のえい人がおって、この合併を決めた日が「九日」じゃったきに、その「九」と「日」を横に並べて「旭」にしたということぜよ。

この土佐郡旭村が高知市に編入されたがは、大正十四年の一月一日じゃったが、「ついでの餅にゃ粉はいらん」というきに、その時の旭村の人口も分かるなら調べちょいとうせ。

※編入時の人口・七千八百六十一人。

わしらァが若い時分、この杓田にゃ三つの産業があった。製紙と製糸、三番目が遊廓、女郎屋、上の玉水新地よの。

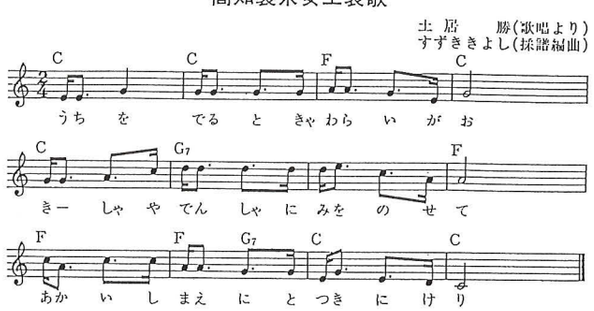
製紙会社へも製糸会社にも週一ぺん、わしらァは下肥を汲みに行たが、その時分の女工は悲惨なもんじゃった。

昭和の初期に高知製糸の『女工哀歌』という歌が流行ったことがある。一番と二番の歌詞は憶えちょるが、あとは忘れたきに、それも分かるなら調べちょいとうせ。

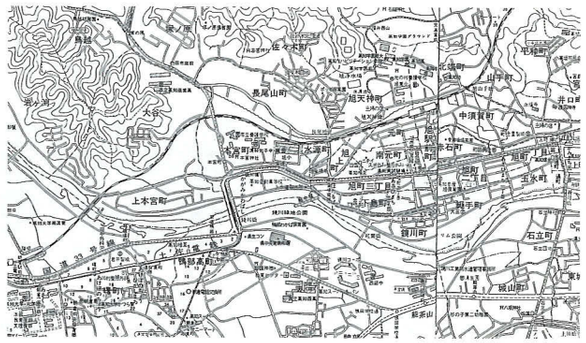
㈠家を出る時笑い顔
　汽車や電車に身を乗せて
　赤石前に着きにけり
㈡高知製糸に来てみれば
　ぐるりは高垣窓ガラス
　ねずみも通わぬ篭の鳥
※㈢朝は四時にて晩七時
　十四時間の其のあいだ
　三度の食事いそいそと
㈣まるで地獄の十四時間
　便所に行くのもままならず
　鬼のような監督さん
㈤あまり工場のきびしさに
　寄宿に帰りて思案する
　ああ此の世の苦労より
㈥遠きあの世の極楽へ
　人も寝静む一時頃
　棚の行李をば引きおろし
㈦上から下まで着替えして
　門番さんの目を盗み
　鏡川原へ急がるる
㈧鏡川原を西東
　袂に小石を拾い込み
　父母許してたまえよと
㈨西に向いては手を合わし
　東に向いては手を合わし
　死ぬる覚悟をしたけれど
㈩死んだら在所の親元へ
　会社は前借取り立てる
　死ぬに死なれぬ篭の鳥

高知製糸女工哀歌

土居　勝（歌唱より）
すずききよし（採譜編曲）



この女工より哀れにあったは遊廓に売られた女郎よのうし。高知製糸と玉水新地は、ほんの目と鼻の先ぜよ。目と鼻の差が娘の運命を分けたわよ。



朝倉、鴨部、尾立、福井、万々、久万……。その周辺の地名は健在なのに、杓田の名を見聞きすることはまずなく、もっとも最近に耳にしたのは杓田の御出身で、いまは亡き田岡典夫先生のお口からであった。

「昔はねえ、河野君。〝万々で飯を食って、久万で糞をひって、杓田で手を洗うた〟と言ったもんですよ」

シバテンよりも遠い存在となった杓田の地名だけに、ＪＲ四国の駅名『高知商業前』は『杓田』であって欲しかった―という思いは強い。

（ＲＫＣ高知放送企画事業局次長）

高知市立保育園園長会編 **ほのぼの子育て**	B6判・二四四頁	定価一、〇〇〇円
岡林清水著 **高知県文学散歩**	四六判・二七八頁	定価一、八〇〇円
高知の文化を考える会編 **高知の文化を考える**	A5判・一八八頁	定価一、二〇〇円
高知市文化振興事業団編 **わがまち百景**	A5変・二二四頁	定価一、二〇〇円
高知県緑の環境会議森林研究会編 **高知の森林**	B5変・二二八頁	定価二、五〇〇円
筒井広道著 **画帳の歳月**	A5変・二五六頁	定価二、〇〇〇円
上森千秋著 **流れと波の科学**	A5判・二四〇頁	定価一、五〇〇円
土居重俊著 **土佐日記** 付方言土佐日記全訳注	A5判・一一八頁	定価一、八〇〇円
土居重俊・浜田敦義編 **高知県方言辞典**	A5判・七三六頁	定価六、〇〇〇円＊
高木啓夫著 **土佐の芸能**	B5変・三四六頁	定価四、八〇〇円＊
清水孝之著 **中山高陽**	A5判・三六二頁	定価三、八〇〇円＊
外崎光広編 **土佐自由民権資料集**	A5判・三四四頁	定価三、〇〇〇円＊
大谷英二著〈高知レポート1〉 **明日を創る**	A5判・二二六頁	定価一、〇〇〇円＊
今井嘉彦著〈高知レポート2〉 **いかにすれば都市の河川はよみがえるか**	A5判・一〇八頁	定価一、〇〇〇円＊
外崎光広著〈高知レポート4〉 **土佐の自由民権運動**	A5判・一五六頁	定価一、〇〇〇円＊

＊は税抜き価格です

お申し込みは最寄の書店か事業団まで

みませの漁業とくらしの今昔

山下幸三

御畳瀬村史料や古老の話によると、明治四十四年当時の御畳瀬村には二つの漁業協同組合がありました。しかし、この小さい村に二つの組合とは如何がなものか、という意見は前々からあったようです。

そして、時代はながれ、昭和十三年十一月七日に戦争機運が進むなかで、両組合は合併して「保証責任みませ村漁業協同組合」として認可を受け、高知県漁業組合連合会に加入しました。これが現御畳瀬漁業協同組合の前身な訳です。

当時の組合員数は二七六名で、漁船数二五五隻、その内動力を有しないものが一〇九隻であるが、その後は動力船が漸次増加の傾向をたどっています。

漁種は大型漁船（底曳漁船）と小型漁船（小釣漁船）の二種に分かれ、乗組員と船主の収入は歩合制度で、例えば乗組員十名位の底曳網漁船の場合、普通乗組員は全漁獲高の二分三厘、船長・機関士は三分四厘五毛とし、残額が船主の収入となっていたようです。

また、この頃には村民の中で三里村種崎の造船鉄工所に働く者が、多くなっています。その賃金は「日給三円から四円なり」とあり、副業については主として女子のカブラ（擬餌鉤）造り、蒲鉾原料の頭切り、畳表の女工、他家の洗濯手伝いなどの日雇いに行く人もあったのです。

次に村民のくらしを調べてみますと、男子の仕事着は明治四十年まで、冬は三枚の布をあわして単物の様に縫い合わし、これを「ドンザ」といって用い、夏はすねまでの長襦袢を着ていた様です。そしてその後は綿入りシャツ、袷襦袢が作業服となり、夏はシャツ、ズボン下を着用し、外出着は昭和元年頃概ね洋服、和服の場合は絹布、毛物を用いていた者が多かったらしい。

女子の常着、外出着には昭和元年頃、「アッパッパ」の使用が見られだし、その後色調、デザインに都会風を真似ることがあったとも言われています。

また、食物について調べてみると「穀類、野菜類すべて他村から之を求む。白米食にして麦を入れる者殆どなし」とあり、生活水にいたっては家持ち井戸が少なく共同井戸を設けています。さらに住居についていえば戸数約三七〇戸、その中でも特に藁葺屋根が多く、見るからに漁村でしたが、次第に財の富むにまかせて改築増築を見、瓦葺木造建築が増えてきています。

土地に伝わる神事のまつり等も、村芝居を行ったり、祈願をして不漁のなおしを行ったりしています。後には相撲も人気を博し、「素人、玄人共に行う」とあります。

この様に、私たちの先祖が漁業で生きてきた中にも、今も変わらない姿が幾つかあります。前は海、後ろは山の典型的な小漁村である為、穀類、野菜類全てを他から買い求めているのです。

白米食を食したり、デザインも都会風を真似るとありましたが、これは大漁があるから宵越しの金は持たない漁村特有の気質が、贅沢を定着させている今を見て、昔のくらしにもあい通ずるものを感じています。

派手な生活傾向の波にのらねば損をするとでも思っているのか、今は車を持たない家を探した方が早く、自然食品を敬遠している食生活を見るにつけ、異様に感じるのは人生の十月の年齢を越したからでしょうか。

現在の漁業協同組合員数は一五〇名で平均年齢六十一歳、高齢化、そして後継者も皆無。漁業経営は何とか安定しているとは言うものの、十年先を思うと心が重くなります。

デッキで鉢巻きの輪が、茶碗酒のヨサコイ節がなつかしい。陸に上がった若者が、海に帰って来る日のみませを夢見る毎日です。

（御畳瀬漁業協同組合長）

種崎からみませを望む

このみませにおいても多彩に行われ、娯楽においては芝居や活動写真、浪花節が人気を集め、不漁続きの時は

気の抜ける場所

長野清子

パーティーコーディネーターをしている私のところに、この夏「海の家」をしてみないかという話がありました。パーティーの方は夏は暇だし、おもしろそうだからやってみようとすぐさま返事をし、七月から始める予定で六月には梅雨空をにらみながらペンキ塗りを始めました。そして六月末にはなんとか店らしく仕上がり、七月一日に店はオープンしました。

私にとって、種崎は母に抱かれて海に入っているなつかしい写真の記憶しかなかったのです。子供達も夏休みに入り、一家で種崎で暮し始めると、セピア色の種崎がカラーになったようにここが大好きになりました。子供達は一日中外で遊びまわり、夜も早く寝て、朝は早く目をさまし犬と遊んだりブランコに乗ったり、私も店がいそがしくてもここに居るとなぜかほっとするのです。

なぜだろうなと考えると、ここでは時間がゆったりと流れているのです。車は通らないし、テレビもないから子供達はテレビの前から解放され遊び放題、改めて車とテレビが私達の生活に与える影響は大きいものだと思ったことです。一昔前はこういうゆったりとした流れの中で子育てや日々の生活があったのだなぁと思うと、今の生活の何と騒々しいことか。

そしてもう一つここには、海があり、土があり、松林があり、やはり自然の中にいると人は落ち着くものです。たまに用事で街に行くと、空気がおいしくないんです。

そしてこんなにコンクリートだらけだったのかと、改めて思ったことです。土がないんですよね。だから真夏の街はがまん大会をしているような暑さで、種崎に帰って店に座っていると、海からの涼しい風が吹いてきてここはユートピアじゃないかしらと思ったほどでした。人はもっと自然の摂理を体で感じなければなりませんね。技術の進歩などで人間の内にある謙虚さが薄れているのでしょう。人は分を忘れてきているのでしょう。

「海の家」に居着いた犬

街では犬や猫たちをあまり見かけなくなりました。ここでは犬や猫たちによく会います。そして店に居着いた犬たちもいます。いろんな動物たちが住んでいるということは人にとっても住みやすい環境なのでしょう。今の「住みやすい街づくり」というのはあまりにも人間中心すぎます。そして道は車に占領され、人は隅っこに追いやられ、道や街並みは機能を果たすだけになってしまいました。私達はもっと大らかに生きたい。三十年程前は人や動物たちも道のまん中を堂々と歩けたんですよね。もう便利さだけの街づくりはやめて、人間らしく心豊かに暮すため、街にもっと土と緑と「気の抜ける場所」が必要です。そろそろ車中心の社会を変えていくため考えなければなりません。たとえばノーカーデーをつくるとか、車が入ってはいけない区域をつくるとか、そうすれば道には子供たちや犬や猫が戻ってき、そして歩くだけの道から立ち止まる道ができ、いろんな声や音が道から聞こえてくるんではないでしょうか。

（もうだまっちゃいられない人達の会代表）

津野山神楽の継承に取り組んで

檮原高校ディスカバークラブ

戸田幸一
中越智亮

昭和四十八年より実施された教育課程の改定にあわせて、文部省は人間尊重の教育、教師と生徒との人間的触れ合いの必要を痛感し、全員参加のクラブ活動の実施を決定した。そこで考え出されたのが週一時間の必修クラブである。

当時の校長先生の発案で、初めは「運動クラブ」「華道」「頭脳スポーツ」に加えて、津野山地区にあるまだ知られていない文化財等を発見しようと、「檮原高校ディスカバークラブ」をつくったと聞いている。

そして、年々内容が充実してきて、地域の伝統文化である津野山神楽を舞うという、今のクラブの活動内容になった。

今、私たちは津野山神楽を中越計清さんから教わっている。今年も第一の目的である福祉施設への訪問を実行し、皆さんに喜んでいただいた。

また、この郷土芸能をこれからの町のため保存しようとする、第二の目的を達成するために頑張っている。そして、今年も第十五回全国高等学校総合文化祭に出場することになった。

琴平で開かれたこの大会も、昨年に引き続いて今年で二回目の出場である。そして、大勢のお客さんの見守る舞台で、私たちは上演した。心臓の鼓動が高鳴った。演技は始まり、徐々に終盤へと時間が過ぎた。あまりの緊張で失敗をしてしまったが、運良く郷土芸能部門上演二十四校中、優秀四校のなかに入った。本当に信じられない事だった。その時部員一同は、とても満足げな顔をしていた。

「鬼神退治」東京国立劇場

八月三十一日、東京国立劇場で郷土芸能、日本音楽、演劇三部門での優秀四校、計十二校が上演した。東京に行って全国の人達と会い、「どれだけ津野山神楽の良さというものを分かってくれるだろうか」と思いながら、津野山神楽を舞った。プレッシャーがかかる。幸い大きな問題もなく終えることができた。失敗せずに舞えたことは、前回の香川大会での失敗のおかげであり、あの時もし失敗していなかったら、今回失敗していたに違いない。やはり数多く舞うことによって、自分の力になっていることがその時初めて分かった。失敗を重ねることによって成功した時の満足感は、私たちにとっては、最大の幸福であった。

そして、今はいつもの週一時間の練習に汗を流している。また、今度は自分たちの高校の文化祭での上演があり、後輩たちにも自分達の習った神楽を教えている。

この町を、この学校を支えていくために、私たちは力一杯の頑張りをしたつもりだ。そして、私たちはこれから町を一生支えていくことになる。また支えていかなければならない。そして、その時が来たら辛かった練習、楽しい思い出をくれたこの学校を、思い出すことになるだろう。

（高知県立檮原高等学校三年）

土佐の芸能10選 ⑨

椿山の太鼓踊り

—土佐山岳文化の通いみち—

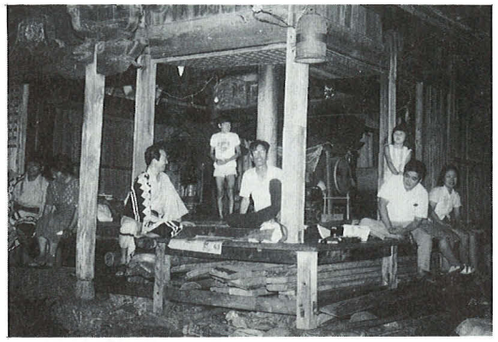
高木　啓夫

夏の夜の暮れ果てて闇夜のなかから太鼓がひびく。赫々と燃えるかがり火を、浴衣姿の踊り子たちが巡りゆく。

網代笠をかぶり、腹にのせるように首から吊り下げた大きな締太鼓を、両手の撥（ばち）でたたく。撥には白木の朴の木を薄く削ってこしらえた真白い大きな総（ふさ）がつけられている。その白さを、かがり火がほのかに染めながら、大きな総はふさふさと花咲き乱るるが如くに揺れ動く。太鼓の音も揺れ動き、暗闇のなかへと消えてゆく。

この太鼓踊りを初めて見に行ったのは〝秘境・平家の里椿山〟と、まだ秘境の時代であった。子どもたちの声々が山の斜面のあちこちから聞こえていた。

休み休みしてのぼった集落の中ほどに大きな杉の木立ちが群がっていた。そこが氏仏堂であった。厨子には牛鬼に似た龍頭、胎児を思わせる裸体像、甲羅に人面を刻んだ蟹、人魚と蛇、それに頭に触れると尾が動くという百足が怪しげに彫り刻まれていた。



あかずの箱を秘める池川町椿山氏仏堂

この厨子の台座には秘宝が納められているというが、梁（はり）で厨子を押えつけているので、どうしても開かない仕組みになっている。氏仏堂が〝不開堂（あかずのどう）〟といわれる由縁である。

この氏仏堂で里人たちとともに腰かけて、その庭先で踊る太鼓踊りを見ていると、氏仏堂の神秘が漂いでて、太鼓の踊りはいっそう深い情趣となって闇夜に浮かび出る。

椿山太鼓踊りは今では数えるほどの太鼓になっているが、明治のころには近村からも踊り子がやってきて、その数は二百にも及び、女子どもは扇子を手にして踊ったという。椿山に限らず近くにも数々の太鼓の踊りがあったのである。

扇子を持って踊ったころの面影は、吾川村や仁淀村の太鼓踊りのなかに残されている。吾川村名野川では都踊りといい、黒袴の太鼓打ちとともに里人たちは扇子を手にして踊る。

両撥で踊る椿山太鼓踊り

高岡郡仁淀村都に伝わるものは都踊りとよばれ、建久六年（一一九五）八月、十八歳で崩御された安徳帝を葬る〝皇陵塚〟の前で踊る。都という地名も安徳帝が都を偲び名付けたと伝えるように、都踊りもまた、帝を慰め申すために踊った京の都の踊りだと伝えている。ここでは男女袴姿であるが、男は太鼓、女は扇を手にして踊る。越知町中大平の太鼓踊りは淋しいものになっているが、明治のころにはやはり女、子どもたちは扇を手にして踊り巡っていた。

こうした太鼓の踊りは長岡郡大豊町でも見られ、盆月になると谷あいのあちこちから、その音色を競う太鼓のひびきが夜明けまでこだましていたという。

吉野川を遡行し、一山越えて仁淀川上流域にまで及んでいるのが太鼓踊りである。高知県中部山岳地域の象徴的な民俗芸能である。

それは徳島県祖谷の神代踊りから流れ出たものであり、その伝播していった道筋は、単に芸能文化の通い路ではなく、土佐の山岳文化の通い路であったことを見逃してはならない。平家、岡林姓、筒井姓、川村姓、山内姓の落人が行き、修験者や木地師の往きかう道でもあったのである。

（高知県立高知工業高等学校教諭）

ほんの一昔は〔9〕

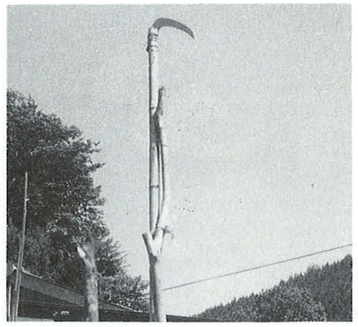
風切り鎌

坂本正夫

島国である日本では風に対する民俗知識が豊富である。風の呼称も土地によって特色あるものが多く、四季それぞれに漁民や農民に注意され恐れられる風が多いが、古くから最も恐れられてきたのは夏から秋の台風、野分の風であった。

強い風や突風は何者かの仕わざによって起こされるもの、と考えられ、台風が近づくと草刈り鎌を庭先や屋根の上に立てる風切り鎌、風除け鎌の習俗が各地にあった。農村では農作物を風の被害から守るため、風神をまつる所もある。

安芸市の僧津や上尾川では以前は台風のことをタツ（龍）といい、台風の害から作物を守るため「タツのオバ（尻尾）を切る」のだといって長さ四、五米の竹竿の先端に稲刈り鎌を結びつけ、風の吹いてくる方向に向けて庭先などへ立てていた。山間部の柿ノ久保や別役では、タツを切る鎌を風上に向けて庭先のタチマチ（洗濯物を干す竿を乗せる二本の木）に縛りつけていたが、これをタツヨケ鎌と呼んでいた。古井ではタツヨケ鎌の下にネズの木を細かく割って編みあげたタツの垣と呼ぶ目籠を結びつけていたが、これも台風を退散させる呪具であった。台風が最も烈しく吹き荒れる状態を「タツが暴れる」と呼んでいたが、このような状態になると古井では戸主が庭に出て、また柿ノ久保では家々から女が戸外に飛び出し、風上に向かって大声で「ホーイ、ホーイ」と叫んでいた。上尾川では家族全員が戸口で、「トーホイ、トーホイ」と大声で叫んでいた。



風切り鎌（高岡郡葉山村藤ノ川～1976年）

長岡郡本山町の北山では台風や大風が吹くときには、先端部に草刈り鎌を吊るした竹竿を打ち振りながら、「風はこっちへ来るなよ、あっちへ行け」と大声で叫んでいた、と伝えられている。上関、下津野、寺家などでは鎌を結びつけた時化鎌とも鎌棒とも呼ばれる竹竿を門口や軒先に立て、風が強くなると風に向って「トーイ、トーイ」とか「オーイ、オーイ」、「ホー、ホー」などというような奇声を発して手を振っていた。強風がおこるのは龍のなせるわざであり、その龍は必ず鎌棒に来るので台風通過後には鎌に血がついている、と桑ノ川の老翁は話してくれた。

南国市浜改田、片山、住吉野などでは台風が近づくと、「タツ（台風の目）を切る」のだといって稲刈り鎌を研ぎ、長い竹竿の先に縛りつけて門口へ沖（南）向けに立てていた。高知市介良野でもよく研いだ鎌を沖向けに立てていたが、二本立てる家もあった。高知市布師田、屋頭、比島などでも同じような話を聞いている。

風切り鎌（吾川郡吾北村土居～1991年）

ハウス園芸の盛んな吾川郡春野町では、今でも大切な施設を守るために、ハウスのそばへタツヨケ鎌を立てる者がいる。

風切り鎌は今は稀にしかみられなくなったが、以前は県下一円にみられた習俗であった。

（高知県立小津高等学校教諭）

第7回高知の映像コンテスト入選作品

高知を撮る　**故郷の風景**　前田嘉彦

洗剤で米を洗う

風俗歳時記

土より下の野菜は水から、上のものは湯からというのが、昔から伝わる野菜のゆで方の常識である。それがいまでは、ホウレンソウを、いきなり水から火にかける向きが、若い人だけでなく、ベテランの主婦にも増えているらしい。

料理の常識を知らないから、むろん応用がきかないといえばそれまでだが、束ねたひもを解かずに水洗いもろくにせずゆでるもの、茎と葉を一本づつちぎっているものもいる。湯を沸かすのに、鍋に蓋をするということすら知らない。束ねたひもを解かないのは「どうせゆでれば消毒されるので…」と、手抜きについての知恵（?）は結構まわっている。

グルメが喧伝され、美味が追求される一方で、このように伝統の料理の知恵が失われていくのはさびしい。

たまごを割るのは、昔の主婦ならだれでも造作なくやった。ところが最近の若い主婦は、これがなかなかできない。ぽんとひび割れをつくるのに、強く当て過ぎて容器に届く前に落としたり、ツメを入れずに親指の腹で強引に左右にひっぱるため、ぐしゃぐしゃにつぶしたりする。黄身と白身に分けることも極めて不器用である。

〈アジを三枚におろす〉というので、アジを三つに切っておろし金ですってしまった。〈塩をひとつかみ入れる〉と聞いて、ほんとうに手を塩の壺に入れてがばっとひとつかみして、菓子の材料に入れた。〈アズキをこして〉といわれて、すりこ木であずきをすりつぶして笊に入れ、水で流したら皮だけが残った―というにいたっては、あきれてものが言えなくなる。だがこれは決して珍しいことではない。

昔から米は〝とぐ〟といって、〝洗う〟とはいわなかった。しかし、今では平気で〝米を洗う〟というし、〝米をといで〟といわれて、洗剤でごしごし洗ったというにいたっては、ただただ脱帽である。

（晋）

細木・三愛病院の院内報「じんせい」

職員の支えで、もう59号

周藤　春男

「じんせい」は昭和六十二年一月に産声をあげました。年に二回発行していた従来の院内報「飛鵬」を発展的に解消、発刊したもので、県内の院内報や社内報では珍しく毎月刊です。職員の協力もあって休刊は一度もなく、この十一月で59号になりました。平成三年二月には節目の50号を迎え、座談会や寄稿文を収容した記念特集号を出しました。建てページは六ページですが、情報量が多いため殆ど八ページで発行しています。

この院内報は病院と職員の相互理解および人間関係を深め、よりよい病院スタッフとして成長すること、また職員同士の融和と親睦を深めることを狙いとしています。「じんせい」の名前は、細木・三愛両病院の医療法人仁生会から採用したもので、題字は職員が交代で執筆しています。

院内報の活動としては両病院のニュースや情報の提供、医療相談、人物・職場紹介、学会レポートを載せるほか、院外エッセー、時事エッセーなど盛り沢山の内容です。接遇など各種研修会の際にはその内容を特集し、繰り返し読んでもらうのも特色といえるでしょうか。

わが子を自慢する「わが家のスター」は、微笑ましい写真が好評でこの連載、途絶えたことがありません。

職員だけでなく、地域住民の方々にもこの院内報を見て頂き、本当の病院の姿を知ってもらうため、一層充実した内容にしたいと念じております。

連絡先　高知市大膳町三七
細木病院内じんせい編集室
電　話　〇八八八－二二－七二一一

ひまわり号を走らせる高知実行委員会ーおらんく合唱団ー

楽しい旅、そして歌を

徳平　真紀

ひまわり号は障害をもつ人の「汽車に乗って旅がしたい」という願いをかなえようということから、高知では一九八四年から走り始めました。汽車や船、バスで旅をし、行く先々で沢山の人と交流を深めて、今年で八回を数えます。

そして、このひまわり号の旅に島村一夫さんが毎年〝ひまわり号の仲間のうた〟をプレゼントしてくれます。ひまわり号が走った後、「歌を楽譜やテープにしてほしい」という声が毎年のように聞かれました。そんな要望に応えなければと思っていたところ、島村さんから「合唱団をつくって録音したら?」と提案があり、さっそく団員を募集し、六月下旬より練習を始めました。若い人から年配の方まで、障害をもった人、学生から社会人と様々な人達が二十数名集りました。名付けて「おらんく合唱団」。いかにも素人っぽくていい名前が付きました。録音までこぎつけられるかという島村さんの心配をよそに、団員はマイペース。しかし、沢山の方々のご協力を得ながら、楽譜集も一緒に発行することができました。決して上手とは言えないですが、団員のひまわり号に寄せる思いがいっぱい詰った歌となりました。

これで「おらんく合唱団」の一つの役割は達成できましたが、解散なんて淋しいから、また次の取り組みをとひそかに思っているこの頃です。

連絡先　高知市鳥越七八－一九
実行委員会事務局竹田祝悦方
電　話　〇八八八－四〇－二八六七

温石短歌会

詩情を拓く

今井　嘉彦

純粋に短歌を愛し、新らしい時代の短歌発展をめざす同士が「温石短歌会」を創設したのは平成三年三月二十四日のことでした。

温石（おんじゃく）というのは、焼いた石を布にくるみ懐に入れて暖をとった生活の知恵に学び、詩情を温め作歌に励むことを念じて会の名称としたものです。

現在、会員百六十余名で、月刊歌誌「温石」を発行していますが、創刊以来内容の充実に力を注いでいます。特に毎号の特集は詩情を深め、すぐれた作品は温石集として評価し、共に好評を得ています。短歌にちなんだ随想なども盛り込まれ、充実した歌誌となっています。

第二日曜日には、中央公民館　　を会場として月例短歌会を開き研鑽の場としていますが、いつも多数の出席があり、活発な批評の交換は会員のよい勉強の機会となっています。また初心者のために「短歌教室」が開かれ、歌論など基礎的な講義と実作指導が受けられます。企画、運営、指導などすべて運営委員会が民主的に相談し合いながら推進させてゆくこととしているのも、この会の大きな特徴です。

初心者の方の参加を歓迎しています。

連絡先　高知市福井扇町一一七一－一八
電　話　〇八八八－二三－四〇七六

「長浜婦人学級」

共に学び、高め合う

山本　元子

長浜文化センターが建設されたことをきっかけに、また、長浜地区全体での婦人で取り組んだ勉強の場がなかったこともあって、当時子ども会のお世話をしていたお母さん方を中心に、三十五名が集まり、公民館のご指導のもと、開講にこぎつけたことでした。

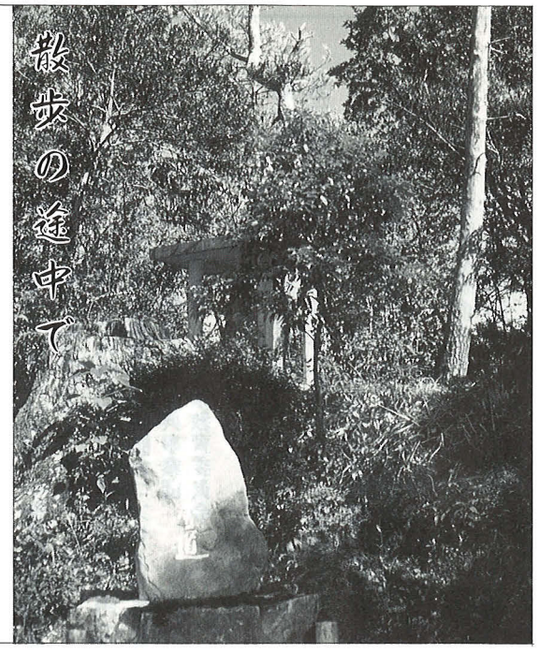
内容としては、講師を招き野外活動を含めた学習会やレクリエーション、それに、趣味講座等も組み込みながら、今年で九年目になります。自主的運営をと、講座の取り組みからチラシづくり等にと、班構成を大切にし連絡をとり易くしています。

年度始めの開級日は、新会員との顔合せと親睦もかね、バスでの史蹟めぐり等に出かけます。また、閉級日は会費の残りを使って茶話会を開き、次年度の運営委員選びをはじめ、希望の講座を決める意見発表の場ともなります。

会員は平均百人前後ですが年々高齢化し、若い方が入会してこないのが残念ですが、戦後の困難な時代を生きぬいて来られた方々の勉強しようという意欲や力強さ、また、やさしさが伝わってきて、お世話させて頂いているちょっぴり若い私たちは、共に学べることに感謝しています。

今月は、九年間休まず講座をもって下さった横川遊亀寿先生のお話しです。皆さん楽しみに待っておられることでしょう。

連絡先　高知市長浜八五七ノ三
電　話　四一－二五四九



散歩の途中で

城下と領家、成山、安居方面を結ぶかつての往還を、宗安寺より長畝峠（二八三㍍）を目指す。左右に連なるイモや生姜の段々畑を縫い、市街の遠景を楽しみながら歩いくと、ひんやりとした木立の中に入る。やがて視界の開けるところ、今年六月に建てられた「土佐の雪道」の碑が目に飛び込んでくる。

風伯

山岡先生を惜しむ

山岡亮一先生の、訃報を悲しむ声は、日がたつとともに深くなっていくように思う。生前、先生とあまり親交がなかったと思われる人たちからも、そうした声が聞かれ、その幅の広さに驚く。

今更に、山岡先生の存在の大きさを思う。本当に惜しい人を失った。

周知のように、二十年前に高知大学学長に迎えられて、高知に住むようになり、大学の充実に大きな功績を残されたが、以来高知をこよなく愛されて、退官後も高知にとどまり、高知県を代表する良識の象徴的存在となった。

瀬戸の家から、御畳瀬への散歩道が大変気に入り、元気なときは毎日散歩されたが、道中で会う人には、誰彼の別なく帽子をとって挨拶され、港の漁師達とも気軽に話をされた。

深い学識を持ちながら、それを内に隠され、ひけらかすことは全くなかった。その人柄が、多くの人から尊敬され慕われた。

学長退官後は、公職に就くことを好まれなかったが、高知市文化振興事業団の理事長だけは、亡くなるまで続けられた。高知の文化を高めることを願う先生の気持ちが、労を厭わないものにしたことだろう。この面でも、大きな損失である。

高知市政の行く末にも関心を払われ、去年の市長選挙の折も、五党相乗りの選挙を見守りながら、「市民主体の民主市政」を堅持することが、なによりも大切と力説されていた。

慎んで冥福を祈りたい。

（華）

武政英策没後10年記念コンサート

土佐ふるさとのうた

日　時　平成3年12月13日(金)　午後6時～午後8時30分
会　場　高知県民文化ホール・オレンジ
入場料　前売り一八〇〇円、当日二〇〇〇円(全自由席)
主　催／武政英策没後10年記念コンサート実行委員会
　　(財)高知市文化振興事業団
共　催／高知県・高知県教育委員会

〈プログラム〉

第一部　一絃琴演奏　武政春子　野村敏子　橋本遊絃
第二部　土佐のわらべ歌　高知少年少女合唱団
　　子どもたちによる日舞(高知県日本舞踊協会)
　　交声曲「子規を偲ぶ」―正岡子規の俳句に依り―
　　フラワーソングクラブ　はまゆうコーラス
第三部　木管五重奏曲「土佐産土歌」
　　木管五重奏曲「四国の子守唄に依る幻想曲」
　　～日本フィルハーモニー交響楽団木管五重奏団
フィナーレ　南国土佐を後にして
　　高知県日本舞踊協会　出演者全員

作曲家あるいは民謡などの伝承作家として、高知県の音楽界に大きく貢献された故武政英策氏の業績をふり返り、幅広い層の市民・県民の参加による記念コンサートを開催します。お誘い合わせの上、多数ご来場下さい。チケットは市内プレイガイドで発売中。

ポリクロスアート'91

― POLY CROSS ART '91 ―

現代美術の分野で意欲的に作品を発表している、高知県内外の第一線作家の多様な作品を展示します。

1991.12.10(火)～12.20(金)
会場：県立郷土文化会館
9：00～17：00(月曜日休館・最終日は16：00まで)
入場：無料

ポリクロスアート'91 アートフォーラム

「地方からの新たな文化の発信」(仮題)と題して、高橋　亨(徳島県立美術館館長)、たに　あらた(美術評論家)両氏をお迎えしてアートフォーラムを開催いたします。(入場無料)
お気軽にご参加ください。

日時　1991.12.9.(月)16：00～18：00
場所　高知共済会館　3階ホール

土居重俊 監修
高知市文化振興事業団 編

B6判・130頁・上製本
定価 1,000円(税込)

土佐弁　土佐日記

紀貫之の名著『土佐日記』を、とさことばでつづるとどうなるか？
古典を身近なものにするとともに、土佐弁にも親しめる楽しい本。

財団法人 高知市文化振興事業団　〒780 高知市本町5丁目2番3号　TEL(0888)73－4365
郵便振替 徳島 8-14869